旅は人生のトレーナー

苫小牧市医師会
光洋いきいきクリニック　関　根　光　男

十五の夏から始めたヒッチハイクは私の旅の原点となった。見ず知らずの大人と目的地までの時間、空間を共にするという旅のスタイルは、世間知らずの高校生にとっては社会勉強の場にもなった。北大入学後は休みの度に貧乏旅行に出かけ、やがて夢は海外へと膨らんでいった。

医学部に進学後休学してから、シンガポールまでの片道切符と500ドル（１＄=360円）を手にしてあてもない世界一周のひとり旅に出た。マドラスから平和だったアフガニスタンを経て、３ヵ月後に陸路ロンドンまで辿り着いた時には、残金は100ドルを切っていた。ハンバーガーレストランでコックをして旅費を貯め、アフリカを目指して再びヒッチハイクの旅に出た。

北アフリカの人々は貧乏旅行者に優しく、１日１ドルの超貧乏旅行ができた。アルジェからサハラ砂漠を縦断しようと思ったが、エルゴレアというオアシスからは南下する車はなく、断念。チュニスからシチリアに渡り、残金が少なくなった頃、ローマで恵迪寮の親友とばったり出会った。親友の中古ワーゲンでストックホルムまで行き、再び不法就労者となった。小ぎれいな宿舎、栄養満点の食事付きの皿洗いの生活は貧乏旅行の日々と比べて天国のようで、福祉大国の初夏を楽しみながらアメリカへの旅費を貯めた。

ニューヨークではウェイターの掛け持ちで、４ヵ月で3,000ドルも貯めたが、１年間毎日書き続けてきた日記を空き巣に盗まれたのは未だに悔やまれる。帰国後の学費用に2,000ドルを送金し、残った1,000ドルで中南米の旅に出た。マチュピチュで意気投合したリマの大学生姉妹とのチチカカ湖、ラパスまでの旅の記憶は今でも色褪せない。３ヵ月のわくわくするような中南米の人々との出会いは、ゆとりのなかった私の心にラテン気質を徐々に注入していったようだ。

学業はおろそかになったが、青春を思う存分謳歌した５大陸44ヵ国、１年９ヵ月の世界一周の旅は、その後の私の人生に彩りを添えてくれた。

独身最後の夏に、南極越冬歴２回の同期の高木君と全長150kmの釧路川を４回に分けてゴムボートで下った。消防署からは前例がなく、危険な個所もあるのでやめた方がいいと言われたが、決行。ボートの底は何ヵ所も穴が開き、買ったばかりのニコンは水没したが、湿原を通って無事釧路にたどり着いた。

妻とは旅先で出会い、結婚してからはひとり旅は封印して専ら家族旅行をした。40歳代前半に佐多岬から新潟経由宗谷岬までの2,800kmを４回に分けて自転車旅行をしたが、家族と離れてひたすらゴールを目指すひとり旅は楽しくはなかった。

還暦を過ぎてから「定年欧州自転車旅行」という本が目に入った。このまま老いていくのにはまだ早い。もう一度若い頃のような旅をしてみたい。それなら欧州大陸縦断自転車旅行は？　欧州最北端を山頂と考えて、最南端から自転車の“水平登山”だ。高低差の少ない最短距離で８ヵ国、7,000km。一度では無理だから３週間ずつ４回に分けて、セミリタイアの友人たちに代診を頼めば職場にも迷惑はかからないだろう、と自分勝手に合理化してプランを練った。

2008年９月に欧州最南端のタリファからビルバオまで1,470km、2009年６月にフランスを横断してルクセンブルグまで1,390km、2010年７月にドイツの川沿いの自転車専用道路を走ってコペンハーゲンまで1,440kmと、全行程の６割を走った。その後４週間の休暇が取れなかったので、2013年にカミーノ・デ・サンティアゴの徒歩旅行、2014年には台湾一周自転車旅行をした。

古稀前の2016年にマルメから欧州最北端のノールカップまで2,700kmを走り、足かけ８年、100日間の欧州縦断自転車ひとり旅を、国民性の違いを肌で感じながら無事故で完走した。若い頃の冒険心はなくなっていたが、ペダルを踏んでいる私は若かった。

一昨年、医療費、教育費無料の国、キューバの自転車旅行をした。民泊先の娘さんは医師で、ブラジルに医療支援に行くと、誇らしげに話していた。USAの支配を拒絶した国の人々は、物質的には貧しくても、生活を楽しむ智恵に長けているように思えた。

これで若者じみた旅は卒業、と思っていたが、体力、気力はまだまだ十分。日本一周自転車旅行がまだ残っている。と思い立ち、去年の10月に青森～箱根峠～静岡、900kmの自転車旅行をした。残すは鹿児島までの1,300km。１万キロ以上も苦楽を共にしてきた愛車とともに、今年の５月にゴールする予定だ。

今までは広く浅く世界各地を旅してきたが、これからは老いに追いつかれる前に、まだ見ぬ土地、かつて旅した土地を妻とじっくりと旅してみたい。

欧州最南端より出発　2008年９月